

エビデンスとヒューマン・ケア

招待講演 ～優しさを科学する～

第七回大会報告

桜美林大学大学院 石川 利江

第7回日本ヒューマン・ケア心理学会が二〇〇五年八月二六日・二七日の二日間にわたって桜美林大学の淵野辺PFCキャンパスにおいて開催された。台風接近が危ぶまれたものの影響は少なく、大会2日間の参加者合計人数は一一名となった。大会テーマは「エビデンスとヒューマン・ケア」であった。これは、ヒューマン・ケアという実践的研究・活動においては、エビデンスの実証は極めて難しいものであるとともに常に意識し検証していかなければならないテーマでもあり、その方法や可能性そして限界などについて、共に考えようという意図であった。研修会は、このエビデンスに関する研修会「エビデンスに基づいた実践的研究法」(佐々木和義先生・兵庫教育大学)と、これも最近の大いなる関心を集めている個人情報保護法に関する研修会「個人情報保護法と医療―特に研究への影響について」(畑中綾子先生・社会政策研究システム)を開催したが、多くの参加が得られ、関心の高さがうかがわれた。エビデンスに関しては、「ヒューマンサービスとエビデンス」(企画 小玉正博先生・清水裕子先生)というシン

ポジウムも開かれ、様々な実践の立場からの議論が展開された。また、今回の大会は実はテーマがもう一つ隠されていた。それは、「子どもの生と死」(企画 森和代先生)についての問題である。子どもの痛ましい事件を耳にすることも多いなかで、今大会のトピックとして考えようということになったのである。そこで招待講演に子ども研究の第一人者である小林登先生をお願いし、さらに「子どもの生と死」のシンポジウムも開催した。参加された方々はどんな印象をもたれただろうか。

研究発表は、口頭発表十二演題、ポスター発表三十演題が報告された。初めて学会発表を経験する発表者も多く、発表会場には緊張と興奮が満ち満ちていた。しかしながら、研究への意欲がさらに高まったのは懇親会かもしれない。程よいサイズのヒューマン・ケア心理学会の良さがこの懇親会で十分に味わったように思われる。普段なら話しかけられないような偉い先生方と身近でお話をし、刺激を受け、研究への期待が高まっていく様子が感じられた。最後に、とにかく無事に大会を終えられたことは、暖かな皆様のご支援によるものと心から感謝を申し上げたい。



研修講師 畑中先生

シンポジウムⅠ

ヒューマンサイエンスにおけるエビデンス

東北大学 岩崎祥一

日時 平成一七年八月二十七日(土)十時～十二時

場所 桜美林大学 淵野辺キャンパス

サイエンスとしてのヒューマン・ケアの方向性として、ヒューマン・サービスにおけるエビデンス(実証性)が求められている。ヒューマン・サービスのそれぞれの領域ごとにそこにふさわしいエビデンスの求め方がある。

今回のシンポジウムでは、医療看護領域から伊藤龍子先生(国立成育医療センター研究所)、医療福祉工学領域から横井郁子先生(首都大学東京)、佐々木和義先生(兵庫教育大学発達心理臨床センター)の各先生方から実践現場でのエビデンスにもとづいた方法を提示して頂いた。この後、指定討論者、岸太一先生(東邦大学医学部)からエビデンスを求めるための心理学的方法論を解説して頂いた。医療現場では、医療事故の予測や検証の段階で、心理学的な方法論を活用する有効性が議論された。今回提示された国内全域に施行される制度や病院施設での事故の予測について、教育心理学分野で成果を上げていく実践的方法が適用され、ヒューマン・ケアがより科学的実践となる期待が感じられた。

シンポジウムⅡ

子どもの生と死―子どもの生命とどう向き合うか

桜美林大学 森 和代

日時 平成一七年八月二十七日(土)

十四時三十分～十六時三十分

場所 桜美林大学 淵野辺キャンパス

現代社会は子どもを取り巻く状況が刻一刻と変化している。特に死は家庭から隔離され、メディアやゲームでは死が簡単に取り扱われている。子どもの問題解決に実践現場で活動されておられる方々から子どもの生と死の問題を報告して頂いた。

戸田久嗣先生(弁護士・長崎弁護士会)からは、重大な少年犯罪に対応する専門職の苦悩と現状が報告され、野中淳子先生(神奈川県立保健福祉大学)からは、発達障害をもつ養育者の心のケアの重要性が指摘された。また山田不二子先生(NPO法人子ども虐待ネグレスト防止ネットワーク)は、児童虐待防止法の背景と把握されている虐待児の養育背景などを報告された。何れも子どもを育てる養育者の地域での孤立、養育困難状況下の親の感情の問題と不安など心理的サポートが求められている現状は深刻であると思われた。指定討論者の木村登紀子先生(淑徳大学)は、事件や問題の



シンポジストの方々

大きさに拘わらず子どもの問題は家族の問題と捉え、社会の支援と将来への責任が問われているとまとめられた。

第一回日本ヒューマン・ケア心理学会奨励賞

研究奨励賞を受賞して

受賞者 伊藤龍子(国立成育医療センター)

日本ヒューマンケア心理学会第七回大会において、本学会初の研究奨励賞を受賞することができまして非常に光栄です。研究成果を評価していただけたことが現在の私の研究活動の糧となっています。これまで保育所や病院において子どもの行動を長い間観察してきました。子どもが医療処置という苦痛を伴う出来事において、それをどのように受け止めて対処しているのかを知り、より良く対処できるためのケアを探求して、どうにか検証にたどり着きました。子どもは健康であることが本来の姿ですが、病気を経験することが悪いことでもなく、無類の意味もあると実感しています。これを機に、今後はさらに新たな視点から子どもへのケアを見直していきたいと思えます。今回の受賞に心から感謝を申し上げます。

講評 第一回日本ヒューマン・ケア心理学会



岡堂先生から伊藤先生へ賞状授与

奨励賞は、各理事による審査の結果、第五号に掲載された伊藤龍子氏の「慢性疾患をもつ幼児の治療・処置場面におけるSelf-Regulationプログラムの有効性」に決定した。

本研究は三六歳の幼児期にある子どもを対象にしている。彼らの治療や処置を行う際に、十分な説明のもとに、事前リハサルや、終了後の強化の手続きを行った方が、そうではない子ども達に比して、心拍数や血圧などの生理的な指標、および子ども達が自分をセルフコントロールしようとする心理的な指標の双方で有意に望ましい結果を得たことが示された。子どもにとって病気状況は、非常に大きなストレスであり、それを克服しようとする力は得てして削がれてしまいがちである。子ども達の病気をケアする行為は、子ども達に潜在する能力を高めるということであり、子ども達の発達段階に応じた積極的なかわりがある点があることを実証的に示した研究である点が評価された。

(審査委員長 志賀 令明)

【招待講演】

「優しさを科学する」

子どもの虹情報研修センター 小林 登

ヒューマンケアの原型には、ベビーケア、インファントケアとがある。これは母子相互作用

の考え方と密接に関わっている。それによって母子間の絆が形成され、それによって子育て、すなわちケアがうまく行く。これは老人でも障害児でも同様である。しかし、赤ちゃんは遺伝的に組み込まれたプログラムに沿って、育っていく中で他のプログラムや成育環境の情報をもっと多く組み合わせることで、育っていく。その情報には「優しさ」に代表される感性情報が特に子どもの心身と知能の発育に重要で、それがヒューマンケアの基盤となると考えられる。その時に重要なのは、ポジテ



小林登先生

ィブなエモーション・コミュニケーションとサポートによる人同士のやりとりと信頼感、連帯感である。「ポジティブな感性の情報」は子どもの成長・発達を進め、病気を癒す力も強めるのである。こうしたやりとりが成立すればケアは成功する。

小林登先生は東大医学部をご卒業後、国立小児病院院長等をご歴任された。現在は、日本虐待・思春期問題情報研修センター他で、子どもの成長・発達に関するあらゆる問題の専門家として活躍されている。



大会での懇親会の様子

日本ヒューマン・ケア心理学会役員(2005年8月より)

会長	岡堂 哲雄	聖徳大学大学院臨床心理学研究科
理事	足立 久子	岐阜大学医学部看護学科
	安保 英男	東北大学大学院教育学研究科
	石川 利江	桜美林大学国際学研究科
	井部 俊子	聖路加看護大学看護学部
※	岩崎 祥一	東北大学大学院情報科学研究科認知心理情報
	上野 轟	大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科
	遠藤 公久	日本赤十字看護大学看護学部
※	長田 久雄	桜美林大学大学院国際学研究科
	小山田 隆明	岐阜女子大学文化創造学部
	岸 太一	東邦大学医学部心理学研究室
※	木村 登紀子	淑徳大学総合福祉学部
※	小玉 正博	筑波大学大学院人間総合科学研究科
	後藤 宗理	名古屋市立大学大学院人間文化研究科
※	志賀 令明	福島県立医科大学看護学部
	島井 哲志	神戸学院大学人間科学部
	清水 裕子	聖母女子短期大学
	菅 佐和子	京都大学医学部保健学科
	廣瀬 清人	聖路加看護大学
	堀毛 裕子	東北学院大学教養学部人間科学科
		以上、アイエオ順 ※ 常任理事
監事	飯田 澄美子	聖隷クリストファー大学 看護学部
	藤澤 伸介	跡見学園女子大学文学部

常任理事の会務分担	木村登紀子	事務局長:庶務・会計等事務総括
	小玉正博	広報担当:ニュースレター発行等
	志賀令明	機関誌担当:編集委員会代表等
	長田久雄	研修担当
	岩崎祥一	学術集会・web担当

第8回大会のお知らせ

日程：2006年9月6日（水）・7日（木）

会場：神戸女学院大学（兵庫県西宮市岡田山4-1）

第8回大会準備委員長：島井哲志（神戸女学院大学）

※ 研究発表申込みの締め切りは5月はじめ、抄録原稿の締め切りは6月はじめを予定しております。（なお、第8回大会の抄録原稿は、A4用紙1ページを予定しています。）

連絡先（第8回大会事務局）：

〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学人間科学部 島井研究室内

電話：0798-51-8638 FAX：0798-51-8418 email: jhc2006@mail.kobe-c.ac.jp

大会ホームページ(URL)：http://www.kobe-c.ac.jp/~shimai/humancare2006.htm

※ 予備的な研究やさまざまな実践などについてもご報告していただき、活発にディスカッションする機会になればと考えております。多くの皆様の発表申し込みとご参加をお待ちしております。

※ 現在、招待講演・シンポジウム・研修会などを計画中です。

大会行事等の詳細は、1号通信にてお知らせいたします（3月発送予定）。

「ヒューマン・ケア研究」第七号投稿論文募集

編集部では会員の方々からの「投稿論文」を募集しております。同封の編集規定及び執筆要項に従った原稿を本学会編集事務局宛に平成十八年五月三十一日（水）までにお送り下さい。（送付先）〒960-0129 福島市光が丘一

福島県立医科大学看護学部心理学研究室内

日本ヒューマン・ケア心理学会編集事務局

学会事務局移転のお知らせ

二〇〇六年四月一日より、本学会の事務担当者が次のように替わりますのでお知らせ致します。（事務局長 木村登紀子・次長 江藤 宏美・担当 田中久仁美）
学会の実務的な業務は、田中様お願いいたしますので、会員の皆様からのご連絡先は次の通りとなります。

〒113-0033 東京都文京区本郷2-38-14 TKビル5F

プライムアソシエイツ気付 日本ヒューマン・ケア心理学会

電話 〇三・五八〇五・〇五二七 FAX 〇三・三八一二・五一八七

メール・アドレス humancarepsy@primeassociates.jp

（このメール・アドレスは、学会専用です。）

なお、WEB関係の業務は、引き続き岩崎祥一先生（東北大学）のもとで行なわれますので、WEBページのアドレスはこれまで通りです。何卒よろしくお願い申し上げます。
新事務局長 木村登紀子

編集後記

「HCニューズレター」7号をお届けします。今回は桜美林大学において開催された第7回大会の様子を大会長の石川利江先生よりご紹介して頂きました。また、併せて役員選挙結果を報告いたします。

本学会の事務局が聖路加看護大学に移転します。新たな活動を展開する予定です。会員の皆様にはご協力の程、よろしくお願い申し上げます。ご連絡は右のお知らせ欄に記載のようにお願いします。

（学会広報委員会・ニューズレター担当 小玉 正博）